

Title	The Politics Aristotle., Translated with an Introduction, notes and Appendixes by Sir Ernest Barker
Sub Title	
Author	森岡, 敬一郎(Morioka, Keiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.24, No.4 (1951. 4) ,p.137(577)- 138(578)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0137">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0137</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奔走し、また製造の亂刺法の特許權取消申請などにも努力し業者の復興と國産の發達に格別の勞功があつたことが推察せられる。

本書は寧ろ寒天研究の史料と云うべきもので、わが國産業史、經濟史を研究される學徒の貴重な史料として江湖にこれを推奨し、且つ著者に敬意を表して前記他の姉妹篇を紹介する日の早からむことを待望するものである。(菊版大二冊 九〇〇頁)

(昭和二五・五・八、日本學士院にて武田勝藏記す)

## The Politics of Aristotle.

Translated with an Introduction,  
notes and Appendixes by Sir Ernest Barker.  
初版 1946. Oxford.

ヨーロッパの政治思想の古典中アリストテレスの「國家論」程後世に強い影響を與へて來た著作は余に多くない。今日この書に對すると何か不思議な力に惹かれるのを覺ゆるのは筆者のみであらうか。このアリストテレスの「國家論」には B. Jowett の英譯その他があり、殊に Jowett のものは不朽の名譯として廣く我國にも親しまれてゐるが、既に刊行後長年月を經過し、その後の古典學研究の成果を取入れた權威ある新譯の刊行が望まれてゐた折から Sir Ernest Barker の新譯の刊行を見たことは誠に喜ば

しきことと言はねばならない。

本譯書は西洋政治思想史の權威であり又ギリシヤ語にも造詣の深い Ernest Barker が専門的智識に比較的缺ける所ある一般讀者に正しい姿でのアリストテレスを紹介することを目的としたもので、最初の計畫では本文のみの簡略な譯を目指したがその不充分なるを悟り現在の如き極めて説明的な譯書となつたと言つてゐる。本書は底本として Newman 校訂本を使用し、Susenail-Innisch 版を参照して翻譯せられてゐる。彼の譯文に於てはテクストにある本文と、アリストテレス特有の簡単な表現から來る誤解を防止するために譯者の附した敷衍の文とは後者を括弧に容れることによつて區別し、一方に於て本文のありのままの形の保存に努めると共に、出來得る限り内容を一般讀者の理解し易きものにすることに努めてゐる。

しかし本書の著しい特徴はむしろ卷頭七十頁余に亙る序説、豊富な註、及び卷末の附録にあると思はれる。此等は要するにアリストテレスの「國家論」を現代的感覺を以て誤つて理解するのを避け、アリストテレスとこの「國家論」とを結付け著者の意圖した内容と考へられるものを一般讀者になるべく容易に理解させようとして附されたものなのである。

即ち序説に於てはこの書の歴史的思想的背景、特にギリシヤ固有の都市國家と獨特の國家觀に對して要領の良い説明が加えられ

てゐる。この序説の最後の部分に於て彼は「國家論」の基本的概念を現はす幾つかの單語につき(例へば *politeia*, *politeuma*, *kyrion* 等)その意味を詳細に説明し、これらの單語が似寄つた現代語に反譯せられる場合に生じ得る誤解の防止に極めて適切な處置を取つてゐる。この部分は俄々ギリシヤ研究の初學者にとつては極めて貴重である。

又本文には豊富な註解が附されてゐる。が、この註は本文の異讀に關する文獻學的な性質のものは少く、主として本文の主要概念に對してアリストテレスの他の著作の記述を以てする説明若くは他の著作者の思想との異同又は類似を指摘するものであつて、要するに一般讀者に「國家論」の内容を正しく讀む爲の手引として附されてゐるのである。特に本文の章末に附された比較的長い註には極めて有益なものが多い。

最後に附録はアリストテレスの他の著書から「國家論」の理解に必要不可欠と考へられる部分を抜粹反譯したものであり、第一部には「倫理學」及「修辭學」中の彼の政治學の概念を示す記述が、第二部には彼の正義、法、衡平の諸概念を示す部分、第三部には政體分類に關する部分、第四部には「アテナイ人の國制」よりアテナイ制度史の大綱を明にする部分、夫々反譯せられてゐる。又第五部にはアリストテレスの著作からの政治に關する逸文が集めてある。

以上の如くこの譯書は「國家論」を出來得る限りアリストテレスの考へたままの姿で讀者に傳へようとするもので、彼の豊富な説明は皆この意圖に貫かれてゐるのである。唯我々として稍不滿を感ずるのは比較的我々の智識の不充分な地名・人名等に關する説明や史的考證に類する註が殆んど皆無といつてよい。要するに一九〇六年 *The Political Thought of Plato and Aristotle* の著書を以て學界にデビューした譯者の長年の研究の成果が結實したものといつてよいであらう。(森岡敬一郎)

### The Oxford Classical Dictionary.

Edited by M. Cary, J. D. Denniston,  
J. Wight Duff, A. D. Nock, Sir David Ross,  
H. H. Scullard.  
With the assistance of H. J. Rose,  
Sir Paul Harvey, A. Souter.  
Oxford 1950.

本書は主として古典文學研究者のためにギリシヤ・ローマの藝術・文學・考古學・地理學・歴史・神話・宗教・科學等の文化の諸方面に互る内容を一冊に所収した最新の古典辭典である。本來一九三三年に大體 Lübker の *Reallexikon* 第八版(一九一四年)を模範として編纂が計畫せられたが、今次大戰のために完成が遅れ、一九四八年に完成し翌四九年に刊行された。その模範とした